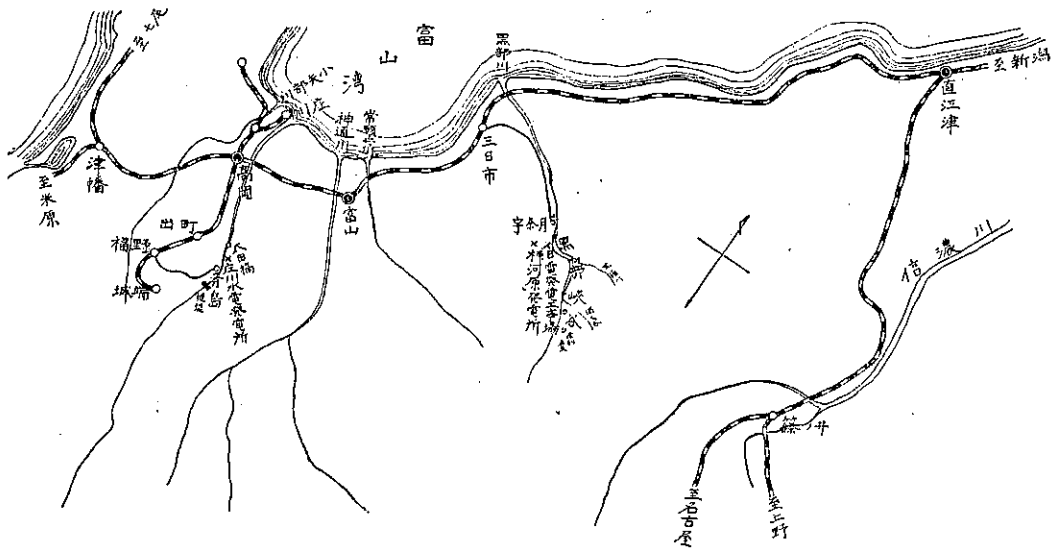


會 務

土木學會第十三回視察旅行記事

昭和 3 年 5 月 12 日（土曜日）より同 15 日に亙り我土木學會第十三回視察旅行として大體次の様なプログラムで富山縣下の發電工事其の他の視察と新緑したる黒部峡谷を探ることに決定したのである。

- 5 月 12 日（土） 上野（又は大阪方面）發
- 5 月 13 日（日） 庄川水電堰堤、試験機械、發電所及水槽等視察、富山ホテルに投宿、晚餐會
- 5 月 14 日（月） 廣貫堂視察後黒部峡谷の日電發電所、堰堤を視察し鐘釣温泉見物、宇奈月温泉旅館にて晚餐會
- 5 月 15 日（火） 上野（又は大阪方面）着。



5 月 7 日の参加締切迄に既に 100 名を突破せんとする我土木學會空前の大旅行團が形成せられたのであるから旅行と共に連想せらるゝ天候が第一に氣遣はれる。

5 月 12 日 大暴風雨襲來の豫報に劫かされて氣遣はれし朝來の豪雨も夕刻には小降となり時にはお日様が見らるゝ様になつた。本旅行の第一歩は午後 6 時 50 分上野發 2,3 等急行で踏み出されるので時刻が迫るにつれて参加會員は陸續と參集された。2 輛（東鐵の好意により 1 輛増結）の寢臺車に分乘して各々假寢の宿を見定むるや漸く旅情湧いて歡談は盡きない。赤羽より山口繁君、大宮より戸谷孝之君の参加を見 44 名の一行となつた。大宮を過ぐるや行途を祝福する爲ビールの滿を引き諸所に奇語漫話起り車内は一の歡樂境と化した。長蛇は眠れる武藏野曠野を喚び醒しつゝ、鶯地に走つてゐる。熊谷を過ぐる頃より空に星

は瞬き初めた我等のエキスカレーションを祝福するかの如く。

5月13日 輕井澤、長野、直江津も夢の間に過ぎほのぼのと空は白み初める頃よりどんよりとした日本海を眺めつゝ富山に着けば先發隊の井上副會長、北村嘉太郎君及高岡電燈技師茂木東一君、富山縣土木課長木村憲七郎君の出迎を受け高岡に着きしは午前7時28分。

黎明より降りたる霖雨も止み大阪方面よりの參加會員も加はり98名の大旅行團は形造られたのである。一同名鐵の好意による特別増結車中にて朝食を喫し富山縣事業に關するパンフレットの配付を受け午前8時30分高岡發出町に着くや特に一行の爲に差廻されたる16臺の自動車に分乘して雨中朝霧に包まれたる庄川邊の太田橋に至る。これより河畔に敷設されたる砂利採集専用鐵道に乗り換へ石井主任技師の説明を得、青島材料置場(約8580坪)に至りこれより河岸の勝景を愛でつゝ小牧堰堤に向ふ。

堰堤前に着きしは10時30分。記念撮影の後パンフレットの配付を受け石井技師より詳細なる説明あり井上副會長一同に代り謝辭を述べ土砂降りの中を現場視察をなす。混凝土は毎日 Slump test をなして使用し又堰堤内部の溫度が如何に變化するかを測定研究し其の結果は他日學會誌上に報告せらるゝとの事であつた。

本發電工事は建設費30000000圓、混凝土總坪數60000立坪、使用水量最大4900個、有效落差236呎にして發電力は最大72000KWと稱せられ、堰堤は拱形重力式にして高260呎、長1000呎、底幅216呎、曲半徑880呎で最大洪水排水量130000個なりと云ふ。

工事事務所横に特にしつらへたる大テント張内にて旅にしあれど椎の葉に盛ることもなく晝食の饗應に舌鼓を打ち食後は種々の試験機械を視察の上0時50分堰堤を後にして一行は二隊に分れ一隊は壓力隧道内を徒歩にて他は工専用軌道により各々發電所に至りサージ・タンクを見る。この頃より空は漸く晴れ遠く彼方の山頂も仰がれる。取水口より4000呎の Pressure Tunnel を通じて本調整水槽に來りこれより内徑11呎、長825呎の鐵管4條よりなる Penstock にて發電所に導水するものなりと。

總て工事半ばなれども完成の曉に於ける堰堤其の他の壯觀を思ふしめ發生大電力は遠く帝都、京阪附近に供給せらるゝとの事である。

之より青島町驛に下り加越鐵道に乗ず。見れば三等車に二等代用の札を附せるは笑止を通り越して不都合千萬な話だ。

高岡に3時26分着、物産陳列所にて小憩の後高岡城趾を見物し4時32分發富山に向ふ。午後5時19分富山着後直ちに自動車に分乘して富山ホテルに入る。

午後7時より同ホテル宴會場にて縣知事外十數會社の有志による歓迎宴は開かれたのである。開宴に當り白根富山縣知事及木村縣土木課長の町重なる御挨拶あり次で井上副會長一行を代表して答辭を述べられた。宴に移るや麥屋節とて遠く源平の昔、庄川の奥五箇山地方

に世を偲べる平家の落人達が慣れぬ鋤鋏を手にしながら朝夕胸に浮ぶは有りし世の榮華の夢のみ、その想、その情の逆りて遂に俚謡となりしものとかや、涙ぐましく哀調を帯びたる古雅な唄に和して踊る直線的で郷土的色調の濃厚なる踊を見て轉た今昔の感を深うし次で悠暢にして北陸情緒を味ひ得る小原節を聞き陶然の境に浸りつゝ 30 餘名の北陸美人の斡旋により宴は何時果つべしとも見られなかつたが夜は漸く静寂に還る頃この盛宴も終つたのである土産として各自に立派な銅製茶托を寄贈せられた。

5月14日 昨日に引き換へ空はからりと晴れて絶好の旅日和となつた。午前8時自動車に分乗して廣貫堂(富山特産製薬所)を視察し9時52分北陸の都富山を發し三日市にて黒部鐵道に乗換へ宇奈月に向ふ。下立口驛附近より漸く山迫り黒部河畔を縫ひつゝ 11時30分黒部峡谷の關門たる宇奈月に着く。

日電黒部出張所にて晝食の馳走に預り直ちに専用軌道に乗り愈々黒部峡谷に入る。上は岬々たる絶壁を仰ぎ足下數十丈奔流の嘯きに膽を冷し遙彼方の立山連峰は残んの雪を止めてゐる。

抑も黒部川は立山連峰に其の源を發し勾配の急なる事、水量の豊富なること、湯水の少き事等到底他にその例を見出さず水力地點中本邦隨一と稱せらる。加之峡谷十數里の間その豪宕なる水態と奇抜なる山容とは彼れ山陽をして再び筆を投ぜしむるであらう。

柳河原發電所上に一時車を止め詳細なる説明があつた。本發電所は使用水量 1750 個、有効落差 406 尺、理論馬力數 90132 馬力、發電力最大 54166 KW なりと稱せらる。

これより奥に進めば谷愈々迫り隧道、雪覆、隧道と山腹を縫ひ其の間に開かるゝ絶勝は蓋し神匠にあらざる限り他の企圖し得べからざる天品であらう。所々に雪崩れの跡や融けやらぬ谷間の雪の下を流るゝ水の様も面白し。黒薙水路橋を Back として記念撮影をなしやがて猫又に着く。此所で大阪方面行の 14 名の諸君と袂を別ち林道の險を味ひつゝ鐘釣温泉に向ふ。青葉の蔭は得も云はれず満山紅染むる晩秋の候も亦一方なるべしと愛でつゝ鐘釣の姿態をなせる鐘釣山を廻り銀波跳る激流を眼下に不安定な吊橋を渡るに心寒からしむるも都人には之又一興であつた。橋を渡れば對岸に新鐘釣温泉を眺め岩を飛びつゝ進むこと數町にして鐘釣温泉に至る。

此處に一軒の旅宿ありて老婆の汲める蒸茶一服は正に甘露だ。胸を開いて涼風を入れつゝ川岸に降るれば他に類を見ざる天然の温泉あり。温泉の妙味人工の加はらざるにありと感じつゝ岩間より湧き出る純にして透明なる泉に浸れば潜める魂を喚び起して夢のふるさとにあこがれしめ暫し無我の境に入る。靜かにあたりを見廻せば此處彼處にカメラの音はしきりにして溪流の響に和して名も知れぬ鳥は木の間より歓迎の言葉を述べてゐる。命の洗濯を終つて猫又に歸りしは午後 4 時直ちに Rolling dam を見る。大圓筒の上下も容易く餘水吐に荒

れ狂ふ水は Parabola に沿ひて走り白煙濛々たり。4時30分猫又を發し宇奈月に着きしは晚餐の仕度に臺所の鼠も影を潜むる頃であつた。丁度發車せんとする大阪方面行の諸君を送り延對寺別館に入り心地よい湯浴みの後やがて樓上に於て晚餐會は開かれた。

開宴に當り日電代表者の丁重なる御挨拶あり次で井上副會長一行を代表して答辭を述べられた。有志諸君の接待至らざるなく加ふるに美妓阿嬌の幹旋と會員諸君の御多藝振りに宴は愈々酣なりしが後髪を引かるゝ思を残し8時58分お別れを告げたのである。黒部峡谷の策源地たる宇奈月を去り難き十數名の人達は富山館共の他で一夜を明し秘策を凝らすとの事であつた。

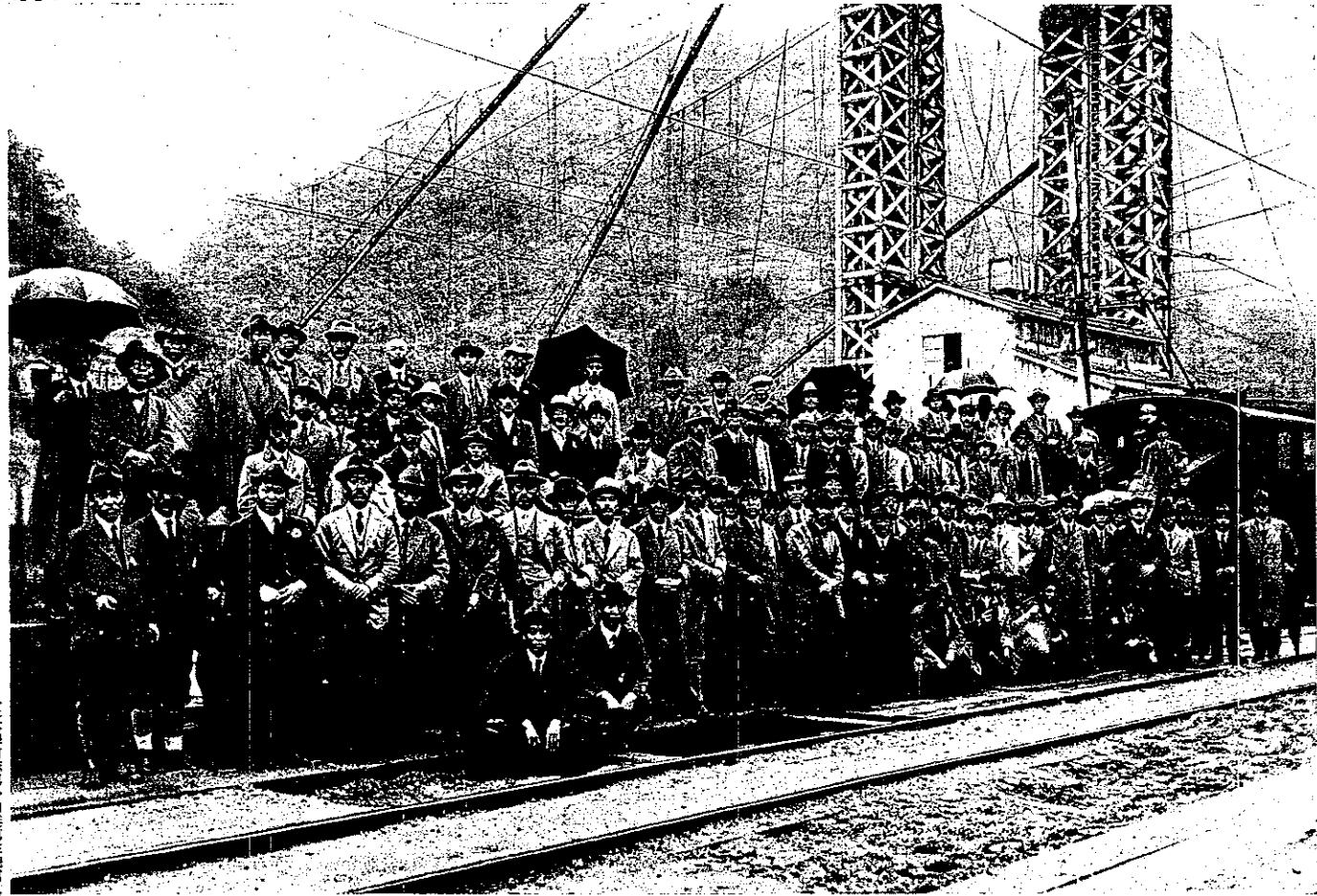
三日市にて上野行急行に乗り換へ増結寢臺車にて祝杯を擧げ空前の大旅行も大團圓を告げたのである。

筆を擱くに當り本旅行が學會創立以來の大旅行團にして視察事項の豊富なりしにも不拘豫想以上の好結果を得たのは之單に富山縣廳及庄川水電、日本電力共の他各會社の周到なる準備と御好意並に關係各員の甚大なる御盡力に外ならず茲に深甚の感謝の意を表すると共に諸氏の御健康を祝福する次第である。

參加會員氏名(順序不同)

東京より	新井榮吉君	有福誠一君	井上秀二君	井上 範君
	池田信君	宇田健二郎君	内海清温君	小野基樹君
	大島滿一君	大野健明君	大村 良君	岡崎保吉君
	加賀山學君	加藤 貢君	片野文吉君	樺島正義君
	神原信一郎君	鬼海治三郎君	熊川信之君	藏重哲三君
	彭城嘉津馬君	下村 猛君	曾山親民君	高橋興四郎君
	丹治經三君	知久清之助君	高橋甚也君	戸谷孝之君
	那波光雄君	那須章彌君	中山忠三郎君	萩原俊一君
	島山好伸君	村松義順君	森 忠藏君	山口 繁君
	山本新次郎君	山中良樹君	山本卯太郎君	谷 喬君
長野より	金子眞男君	塚本 積君	根來簡二君	
直江津より	飯田清太君	遠藤藤吉君	後藤 登君	宮本武之輔君
	青山 士君	大島太 郎君	坂田昌亮君	坂上丈三郎君
富山より	大野徳風君	高橋嘉一 郎君	中川政次郎君	山本一之助君
	森下文作君	木村憲七郎君	石井顯一 郎君	田中喜代志君
高岡より	大河戸宗治君	大鹽政治 郎君	鎌田 亮君	米山辰夫君
	青戸信賢君	大串榮太 郎君	山口義彦君	須山英次郎君
	林 紀彦君	和田清三 郎君	石田昌平君	高橋逸夫君
	小林 勇君	近藤泰夫君	鈴木重英君	梅津理次君
	西出辰次郎君	村瀬吉雄君	赤松三 郎君	杉谷 茂君

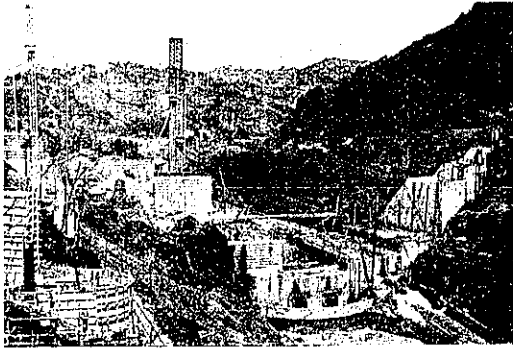
寫眞第一



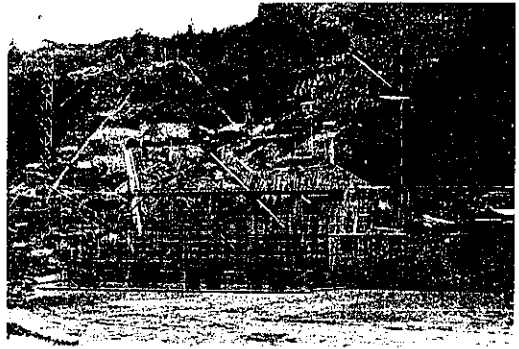
(土木學會誌第十四卷第三編第廿九頁)

小牧堰堤工事ミキシング・プラント前に於ける土木學會視察旅行團

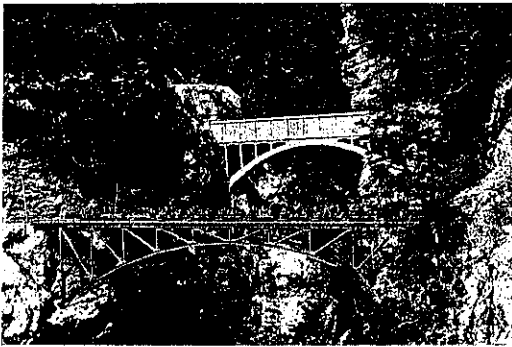
寫眞 第二



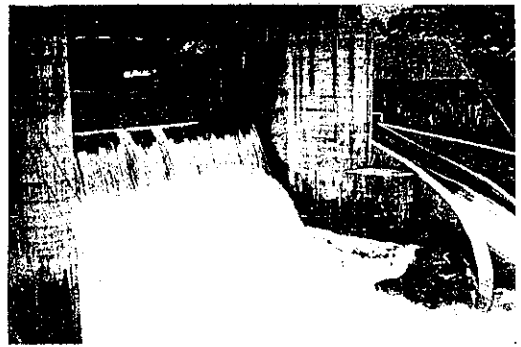
庄川水電小牧堰堤工事



庄川水電發電所及水壓鐵管工事



黒部峡谷，黒龍支流の跡曳水路橋を背景とせる
土木學會視察旅行團



猫又堰堤（ローリングダム）



黒部峡谷，新鐘釣温泉附近吊橋



黒部鐘釣温泉

西 義 一君 伊 藤 駿君 喜 多 權 次 郎君 堀 口 多 吉君
 山 邊 芳 雄君 渡 邊 義 道君 土 屋 祥 三君 衣 川 清 一君
 齋 藤 飾君 和 田 重 辰君 松 田 文 治君 友 永 染 藏君
 杉 村 博 通君 小 川 琢 磨君
 本會事務所より 北 村 嘉 太 郎君 山 岸 倉 藏君 小 林 孝 造君 松 本 利 一君
 中 川 一 美君

計 98 名

本旅行費内譯は次の通りである。

視察旅行費内譯報告

2 等汽車賃急行料及廢臺料金	946.64
出町太田橋間自動車賃	45.00
富山ホテル宿泊料 78 人分 (茶代女中心附共)	589.00
東京方面列車ホーイ及高岡驛朝食給仕人心附	35.00
東京方面往復列車中飲物及朝食代	50.46
徽章, 紙コップ代等	18.95
紀念寫真代	21.20
計	1 706.25

(以上)

會

務

土木學會誌 第十四卷第三號 昭和三年六月

○昭和三年三月二十二日役員會を開き、岡野會長、中川副會長、井上、加賀山、黑河内、中村、米山の各常議員、古市、中山兩前會長、丹治、村兩主事出席岡野會長議長席に着き下記事項を決議せり。

△三月三十日麴町區有樂町一丁目一番地生命保險會社協會に於て第四十九回講演會を開催し、仙臺鐵道局技師鴛谷瀧雄氏に防雪設備に關する講演を依頼すること、尙終了後同所に於て晚餐會を催すこと。

△前回の役員會に於て決議したる本年度視察旅行の日程を承認すること。

△萬國工業會議見學委員として本會より會員中川吉造君を選出すること。

△同論文委員として會員大河戸宗治君を選出すること。

△後藤傳五郎君外十八名を贊助員とすること。

其の他會務に關する事項

○同月三十日午後五時より東京市麴町區有樂町一丁目一番地生命保險會社協會に於て第四十九回講演會を開催し下記の講演あり。當日の來聴者は岡野會長外會員及會員外の者とも併せて約七十名。尙閉會後同所に於て晚餐會を開き三十七名の出席者あり、盛會裡に同八時半散會せり。

○同年四月四日編輯委員會を開き黑河内編輯委員長、菊池、田中、平山、古川、三浦の各委員菊池囑託出席會誌編輯上に就き協議を爲せり。

○同月二十三日役員會を開き岡野會長、井上、中川の兩副會長、井上、大岡、加賀山、黑河内、福田、牧野の各常議員、中山前會長、菊池、田中、平山の各編輯委員、丹治、村兩主事出席岡野會長議長席に着き下記事項を決議せり。

△コンクリート及鐵筋コンクリート調査委員會及用語定義及解釋調査委員會並に別刷販賣の件は次回役員會迄尙考慮すること。

其の他會務に關する事項

○同年五月九日編輯委員會を開き黑河内編輯委員長、菊池、鈴木、田中、高橋、平山、古川、三浦の各委員及菊池囑託出席會誌編輯上に就き協議を爲せり。

○同年同月十二日より十五日に互り第十三回エキスカッションとして北陸地方庄川水電及日本電力發電工事の視察旅行を爲す。參加會員及准員九十八名なり。(別項視察旅行記事参照)

○同年三月二十七日土木學會誌第十三卷第一號發行成規の手續を了し三月二十八日各會員に配付せり。

○准員岸本日出次郎君は「岩本」と改姓, 同臼井清彦君は「靖直」と同村山正一君は「圭史」と何れも改名せられたる旨通知ありたり。

○下記の諸君は退會せられたり。

堀 親 道君			會 員			准 員		
伊 藤 光 雄君	石 上 源 隆君	漆 間 武君	佐 藤 堤君	櫻 井 勇君	東 海 林 誠君	杉 浦 朝 太郎君	園 田 博 智君	藤 沼 清君
津 田 健 太郎君	羽 成 豊君	濱 田 文 路 二君	山 田 昇 太郎君					
中 川 達君			學 生 員					

○昭和三年三月十六日以降同年五月十五日迄に於て入會を承認し名簿に登録したる者下記の如し(○印は轉格者を示す)

會 員 (三十名)		
井 口 眞 造君	○荻 野 竹 四 郎君	川 浪 知 熊君
小 山 宗 雄君	小 村 捨 楠君	佐 賀 源 一君
眞 田 辰 次 郎君	○清 水 又 一君	○田 邊 貢君
樽 谷 萬 治君	戸 田 一君	○中 村 孫 一君
○新 谷 卯 太 郎君	○野 田 誠 三君	本 多 惠 治君
○村 井 佐 八君	○村 瀬 吉 雄君	山 崎 利 雄君
○山 下 輝 夫君	吉 田 岩 五 郎君	池 田 德 治君
○大 鹽 政 治 郎君	○大 島 太 郎君	○窪 部 保君
○絹 笠 半 藏君	○坂 田 昌 亮君	○島 野 貞 三君
田 村 義 正君	中 島 愿 三君	齋 藤 節君
准 員 (四十名)		
阿 部 護君	秋 山 辰 藏君	淺 野 朝 雄君
井 上 映君	井 上 良 一君	○石 井 多 三君
江 口 辰 五 郎君	江 戸 良 三君	岡 田 保 三君
片 岡 良 彦君	銀 谷 俊 雄君	日 下 逸 夫君
小 島 九 三君	杉 山 貴 一 郎君	高 橋 泰 藏君

中山 榮君	永井 重雄君	野々口 市太郎君
廣瀨 美壽君	藤田 澤之君	松田 五四三君
○前田 藤介君	山岡 照一君	山田 友治郎君
山田 政治郎君	吉岡 重慶君	前原 源次郎君
荒井 文太郎君	上山 鐵之助君	○尾崎 秀之君
佐原文 一君	佐分利 三雄君	○武井 金二郎君
鶴田 重盛君	○洞庭 謙君	平尾 勝君
○宮田 隆一郎君	米田 正文君	鷺見 雄藏君
村井 義英君		

學 生 員 (六 名)

上原 榮人君	川久保 重政君	佐藤 繁次君
坂本 敏一君	高原 芳夫君	三谷 千里君

○昭和三年三月十六日以降同年五月十五日迄に於て寄贈又は交換を受けたる雜誌其の他下記
の如し。

寄贈を受けたる分

工業三, 四月號	2冊	大阪工業會
工業之大日本第 3, 4 號	2冊	工業之日本社
大阪港勢一斑	1冊	大阪市役所
セメント界彙報第 183, 184, 185, 186 號	7冊	セメント界彙報發行所
帝國學士院記事第 2, 3 號	2冊	帝國學士院
發電水力調査概況	1冊	逓信省電氣局
滿洲技術協會誌第 5 卷第 24 號	1冊	滿洲技術協會
水膠會誌第 5 卷第 7 號	1冊	水 喉 會
工業と社會第 30 卷第 4, 5 號	1冊	東京工業會
電氣製鋼第 4 卷第 314 號	1冊	電氣製鋼研究會
工學彙報第 2 卷第 6 號及第 3 卷第 1 號	2冊	九州帝國大學工學部
地震研究所彙報第 4 號	1冊	東京帝國大學地震研究所
日立評論第 34 號	2冊	日立評論社
建築卜材料第 1 卷第 12 號	1冊	建築卜材料社
研究報告自第 3 號至第 9 號	4冊	製 鐵 所
工事畫報第 4, 5 號	2冊	工 事 畫 報 社
名古屋工業會彙報第 60 號	1冊	名古屋工業會

啓明會昭和二年度事業報告	1冊	啓 明 會
土木建築資料通信第 149, 150, 151號	3冊	土木建築資料通信社
三菱電機第 4, 5 號	2冊	三菱電機神戸製作所
シビル第 4, 5 號	2冊	シ ビ ル 社
東洋建築材料商報四, 五月號	2冊	東洋建 材 商 報 社
昭和元年度直轄工事年報	1冊	内 務 省 土 木 局
京都帝國大學一覽	1冊	京 都 帝 國 大 學
漁港修築獎勵資料第二輯	1冊	農 林 省 水 産 局
明電舎ジャーナル第 2 號	1冊	明 電 舎
シネマ教育創刊號	1冊	東 京 シ ネ マ 商 會
工學部記要第 8 號	1冊	東 京 帝 國 大 學
第五回保線講話會記錄	1冊	鐵 道 省 工 務 局
榮光第 1 卷第 2 號	1冊	榮 光 社
交換の分		
業務の概要	1冊	鐵道省 大臣官房 研究所
業務研究資料第 2, 3 號	2冊	同 上
帝國鐵道協會々報第 2, 3 號	2冊	帝 國 鐵 道 協 會
機械學會誌第 128, 129, 131, 132 號	4冊	機 械 學 會
建築雜誌第 507, 508 號	2冊	建 築 學 會
工業要録第 3, 4 號	2冊	工 業 要 録 發 行 所
電氣學會雜誌第 476, 477 號	2冊	電 氣 學 會
日本建築士第 3, 4 號	2冊	日 本 建 築 士 會
造船協會會報第 42 號	1冊	造 船 協 會
鐵と鋼第 3, 4 號	2冊	日 本 鐵 鋼 協 會
造船協會雜纂第 72, 73 號	2冊	造 船 協 會
工政第 101 號	1冊	工 政 會
工業化學雜誌第 31 編第 4 冊	1冊	工 業 化 學 會
同上歐文	1冊	同 上
港灣第 4, 5 號	2冊	港 灣 協 會
衛生工業協會誌第 4 號	1冊	衛 生 工 業 協 會
日本鑛業會誌第 516 號	1冊	日 本 鑛 業 會

會 員 關 新 市 君

會員關新市君は昭和三年五月九日逝去せられたり、本會は此の訃音に接し弔詞を靈前に呈し哀悼の意を表したり。

會 員 深 瀬 恆 治 君

會員深瀬恆治君は昭和三年三月二十一日逝去せられたり、本會は此の訃音に接し弔詞を靈前に呈し哀悼の意を表したり。

准 員 川 本 暉 二 君

准員川本暉二君は昭和三年三月四日逝去せられたり、本會は謹んで哀悼の意を表す。